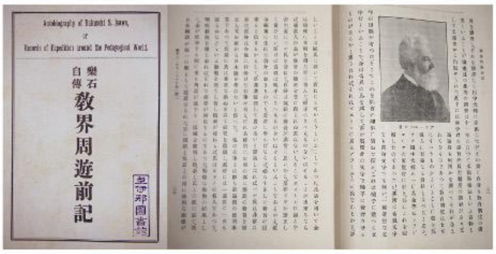
伊澤の晩年をかけた業績、吃音矯正事業(その1)

吃音矯正事業は、伊澤のライフワークだった?

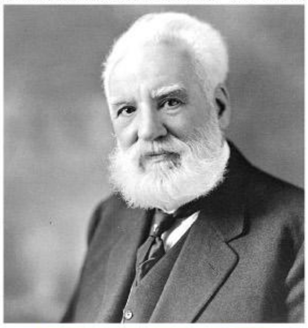


資料12「楽石自伝 教界周遊前期」

「伊澤修二の生涯」を見ると、晩年に主に吃音矯正事業に取り組んでいることが分かる。

明治33年、伊澤は、病気のため東京高等師範学校長を辞した。伊澤50歳のことである。伊澤の自伝「楽石自伝教界周遊前期」(資料12)(明治45発行、以下「自伝」と記す)の内容は、この病気の年までである。音楽教育を始め、国家教育や台湾教育など種々の教育事業でパイオニアとして活躍した伊澤だが、「自伝」では、これまでを「人格成立上に就き材料蒐集時代」と記している。

病気治癒後の伊澤が主に取り組んだのが、吃音矯正事業で、明治34年には「視話法」を発行、さらに、明治40年には、私財を寄付し「楽石学院」を建設、「視話法」を用いた本格的な吃音矯正事業に取り組み始めている。



Alexander Graham Bell
1847-1922

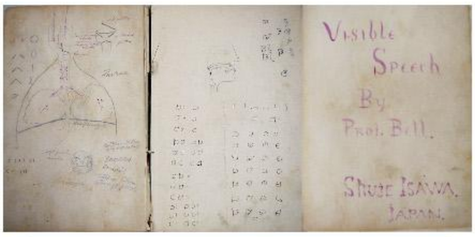
これらのことから、伊澤が一番情熱を注ぎたかったのは、吃音矯正事業だったのではないかと推察することができる。

吃音矯正への取組みのきっかけは、アメリカ留学中にグラハム・ベルと出会い「視話法」(Visible Speech)を学んだ時(資料13)からである。末弟の末五郎が吃音に悩まされていたことも、関心を持った理由になっていたのかも知れない。

視話法と出会った明治9年(1876)から、生涯を終える(1917)まで、42年間にも及ぶ期間からも、吃音矯正事業は、実は伊澤のライフワークであったとも言えよう。

グラハム・ベルに視話法を学ぶ

「自伝」によれば、伊澤と視話法との出会いは、アメリカ留学中の明治9年、フィラデルフィアの米国独立百年記念博覧会の視察に出かけた時である。そこでギリシャ文字でもローマ文字でもない一種奇態な文字の掛け図を見つけた。この文字を実際に発音させる者が、ボストンにいるグラハム・ベルであることを知り、「唖子にさえも、ものを言わせることができるなら、通常人の余が発音矯正を受け得られぬはずはない」と、暗夜に光明を得たほど喜んだ伊澤は、ボストンへ帰るやいなや直ちにベル氏を訪ねて、英語の発音矯正を願ったそうである。



資料13「視話法を学んだ留学中のノート」

電話で話された最初の言語は、実は日本語だった?
電話機の発明で有名なベルだが、視話法を発明したのが父のメルビル・ベルであり、親子2代にわたり、聾教育に尽力している。聾教育のための研究の中で発明されたのが、電話機になる。「自伝」の中で、伊澤は「余と氏との間において、わが日本国語が第一の声として送話せられた」と述べている。「自伝」には、ベルが「特別にお前のために英語の発音を矯正し、またお前から日本語を学びたい」と答えたとの記述もあり、ベルが日本語を知っていることになるので、電話により日本語が送話された可能性は、十分にあることになる。

視話法とは

伊澤は、「視話法について」(資料14)の中で、「視話法とは、読んで字のごとく、人の口より発する音を耳で聞くことの代りに目で見る、すなわち話を視る方法」と書いている。

口を開いて舌がどこに行って口の形がどうなるかということを記号で示し、その記号の組み合わせで発音するというものである。

この視話法の原理を応用し、吃音矯正法を組み立て、社会事業に貢献していくことになるのである。

資料14「視話法について」

＊ 資料は「伊澤資料」として上伊那教育会所蔵、「創造館」に保管されている。　上伊那教育会郷土研究部伊澤修二委員会作製　2012年10月27日